真宗寺
寺報 竹の

平成二十六年第二号

住職挨拶

先日、五月二十七日に私の実父が亡くなりましたことをご報告すると共に、通夜・葬儀とご参列頂きました、お檀家の皆様に深謝し、心より厚く御礼申し上げます。父が亡くなる最後の一ヶ月間は寺族・役僧さん達の助けを頂き、毎日、病院・実家に寝泊まりし、お陰様で母と二人で父の最期を看取ることが出来ました。毎朝、互いに家族で今日という新しい一日（命）の始まりの「おはよう」と挨拶出来る事の幸せに気付かせて頂きました。もう父に「おはよう」と挨拶しても返事してくれる事はありませんが、それを超える超越した命そのものへの感謝の挨拶「南無阿弥陀仏」というお念仏が私には用意されておったのだなと、改めて教えて頂き、気付かされました。子供を抱っこしながら一緒にお参りをしていると、親から私、私から子への命の引き継ぎ、尊さに感謝する今日この頃です。「南無阿弥陀仏」　合掌

●現代に生きる仏教語

「観察」

物事のありのままの事象を、客観的に見極める意味で使われますが、仏教では「かんざつ」と読み、仏の知恵を視点に用いて、自分と他者や身の回りの現象をありのままに観ることを指します。一般的な意味との違いは、自分がその中に含まれている場合と含まれない場合です。含まれていない場合は、無責任な傍観者で見る側の倫理に偏ることになります。

「愚痴」

仏教では三毒の煩悩の一つを表しています。目の前の事象に執着することで、偏った見方をして、自分の都合のいいように思い込むことが、真実を遠ざけ愚かな心を生むのです。

「自覚」

自分に目覚めることで、飾りのない本来の自分との出会いが成立する意味で、自らさとることを指します。

●「悪の捉え方とその現代的意義について」

1．　はじめに

現代社会では、仏教の教えは形骸化する一方、連日のテレビ報道では、凶悪な犯罪が後を絶ちません。山折哲雄によれば、日本の歴史上「悪」の問題にまなざしを向け、たじろがずにとり上げたのは親鸞聖人であるとしています。一方、西田幾多郎の『善の研究』以降哲学的論題である「悪」を無視する時代が続いているとも述べています。

親鸞聖人といえば、悪人正機の説が最も有名でありますが、本当は法然上人の思想であったことはあまり知られていません。皆さんが抱かれる疑問は、なぜ悪人が救われる資格が善人よりあるのかという問題についてでありましょう。今回は悪について考えることで、現代社会にも通じる仏教を少し紹介してみたいと思います。

2．　親鸞の悪の捉え方

親鸞の悪人正機の悪人観には、救う者と救われる者との差別的関係性はなく、善悪の二分性もないところに親鸞の思想の画期性が指摘できると考えられます。

親鸞の示す煩悩とは、煩悩不浄具足と表現されるように穢悪の意味があります。実際のインドのサンスクリット語では、煩悩のことをクレーシャ（kleśa）といい、「こころの穢れ、悪い心のはたらき」という意味になります。もう一つには「もう一人の私、内なる妨害者」とする意味もあります。

るかという自覚（影の意識化）にあると思います。

5．悪の自覚がもたらす現代的意義

歴史上、釈尊が自覚した悪については、善導や親鸞のみならず、ユングなどに共通した善悪の「対立のない自覚」により無限性との出遭いをもたらしてきたのです。悪の問題は、現代の心理学的に置き換えれば、私たちの内なる「影」の問題と言えるでしょう。『善の研究』以降、悪と向き合おうとしない社会性が構築されつつある日本の現代において、親鸞の悪に対する思想は必ず「影の意識化」を可能にし、未来に均衡をもたらす智慧となるでしょう。親鸞聖人は一生を通して、内なる影と向き合った人間であった事は言うまでもありません。

6．悪と現代と現代的意義

悪を排除する傾向は、今に始まったわけではありません。お払いの思想や豆まきなどの歴史的背景には、穢れた悪に対する憎悪や生理的にこれを遠ざける防衛本能があり、私たち日本人には根深く居座っています。この根源的な作用を釈尊は、煩悩の三毒で説明しています。三毒とは、貪欲（どんよく）（欲望、貪りの心）・瞋恚（しんに）（嫌悪、怒り、恨み）・愚癡（ぐち）（無知、愚かである）を意味します。この三つは全て自らの苦しみの根源を表しています。三毒に毒されれば、本人も家族も不幸に陥ります。

私達が常に抱えている組織の人間関係や家族関係、外交などの問題の根本には、怒りや好き嫌い、損得勘定、そして自らを省みようとしない自分に原因があると自覚して生きる必要があるのです。この自らの影と向き合う姿勢により必ず真実に出会え、自分に勝つことができると釈尊は言うのです。釈尊の悪の考え方から言えることは、悪は外に見ないで、内に見ることで人間は成長するという事になります。

私も三度の会社倒産に遇うことで、人の失敗には敏感で、自分の失敗には鈍感であったことを身につまされました。絶望的な状況に置かれ、本当の自分に出会い、全て自分の責任であることを自覚した時、初めて心の平安は訪れるのです。

合掌　安部　直広

■真宗寺年間行事のご案内

定例聞法会　八月二十五日（土）、十月二十五日（土）
毎月十時半より
※真宗寺本堂にて講師の先生より毎月二十五日に皆様へ浄土真宗（親鸞聖人）の教えを分かりやすくお話して下さる会です。

声明会　九月二十一日（日）、十月十九日（日）
毎月第三日曜日午後二時より
八月はお盆時期の為、お休みにさせていただきます。
※住職が皆様にお経を分かりやすく説明し、一緒に声を出しながら触れ合う会です。

お寺で夏のお楽しみ会　八月十七日（日）午後六時より

秋彼岸法要　九月二十三日（火）十時半より

報恩講　十一月十一日（火）十時より

除夜の鐘つき　十二月三十一日（水）午後十一時四十五分頃より
※無料で、お雑煮の炊き出しがあります。

親鸞は、死ぬまでこの煩悩は祓うことはできず、制御不能に陥ることを常に自覚し、この内なる影である「クレーシャ」と生涯を通じて戦う必要があると捉えていました。

親鸞は、影と対話し向き合う姿勢により、自己中心の生き方から本来の自分の全体性を辿る生き方へ転換する過程を得たからです。

内なる影と自己との対話こそが、親鸞と釈尊に共通した煩悩に対する相対化を意味します。煩悩の相対化とは、煩悩を自分の一部として認めながら観察して自己を理解する過程を示しています。また、煩悩を滅することは、無我でありますが、煩悩の「滅」は、「ニローダ(nirodha)」であり、本来「抑制」を意味し、煩悩をコントロールすることを示しています。

奈良康明（1988）によれば、釈尊の成道後に悪魔が現れており、悟っても煩悩は、姿を現し、消えない。そして現れれば、その都度制御すべきことを仏典が物語っていると指摘しています。

3、　釈尊の悪の捉え方

「スッタニパータ」（中村元訳『ブッダのことば　スッタニパータ』1986年岩波文庫）は、歴史上の釈尊のことばに近い最古の聖典であり、釈尊が成道前と成道後に悪魔と話している内容が記されています。その中の四三六、四三七偈には、悪魔の軍隊としての欲望、嫌悪、飢餓、妄執、睡眠、恐怖、疑惑、みせかけと強情や自己欺瞞、驕慢さなど、煩悩について触れている個所もあります。

この仏伝の主語は常に釈尊本人ですが、「サンユッタ・ニカーヤ」（中村元訳『ブッダ　悪魔との対話』1986年岩波書店）では、「如是我聞」に代わっていることから、悪魔は釈尊の内なる影であり、釈尊は既に自己の視点から影を相対的に捉えていると老松克博は指摘しています。釈尊は『ダンマパダ（法句経）』で悪を次のように説いています。

悪は私には来ないと言って、悪を軽く見ないように。水滴が落ちても、やがて水の瓶が充たされるように、愚か者は悪を少しずつ積み重ね、やがて悪で充たされる。（『ダンマパダ』一二一の意訳）

この言葉は、テレビで報道される殺人鬼や悪人を見る側、他人事であり偽善者として傍観する私達に対しての警告です。人間は条件次第で、人も殺す心の闇である煩悩を持ち続けています。常に悪に転じる自覚がなくなれば、自分では制御不能に陥ることを教えているのです。オウム真理教以降、宗教に対する拒絶反応は、厳罰化を求める方向へと進めました。しかし、人を殺すことを促す宗教などあるのでしょうか？それは宗教という名を借りた、恐れや不安から生じる集団の暴徒化にすぎません。人殺しについての釈尊の言葉は次の通りです。

すべてのものは、暴力におびえる。すべてのものは、死を恐れる。自分の身に起こることと考えて　殺してはいけない、殺させてはいけない。（『ダンマパダ』一二九の意訳）

悪いことが身に起こると誰かのせいにして、集中的に見せしめの生贄として公にさらし、罵声を浴びせ、咎め、全ての怒りの矛先を向ける社会の風潮にある構造は、学校に潜むいじめと同じ構造を持ちます。これは常に精神性が不安定で、生き方をまだ見つけられない未熟な人格者の集団の暴徒化であり、原始時代の供犠や戦争に通じる構造そのものです。子ども達が見習う大人たちが同じ態度をとれば、これを良いお手本として模倣することはいうまでもありません。外見だけ立派に見せて自分を大きく見せようとか、権威を誇張して力を行使する大人は、内面が伴ないません。釈尊はその未熟さを見抜いていました。

バラモンの髪を結ってカモシカの皮を身にまとった愚か者よ。それが一体なにになるのだ。内側が汚れているのに外側だけを飾っている。（『ダンマパダ』三九四の意訳）

バラモンとは、カースト制度の身分の頂点に立つバラモン教の僧侶の事です。同様に中国の善導は『観経疏』の中で

外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ

と説いています。仏の目から見れば、私達は偽善の皮を被った悪人となります。それは他人を咎め、攻撃する心が全てを語ることとして理解できるでしょう。

他人がした事、しなかった事を観察してはいけない。他人のあやまちを観察してはいけない。自分がしたことと、しなかったことだけを、観察すればよい。（『ダンマパダ』五〇の意訳）

他人の嫌な部分はよく見えます。しかし、よくよく考えると自分にも同じような性質があり、それを認めたがらない自分が他人を観察し、傍観者となり、善人の仮面を被ることになるのです。灯台元暗しとは、自分に甘く、他人を許す事が出来ないことです。

かつて千人の人を殺したアングリマーラは、釈尊の弟子となって殺された遺族の家に托鉢で廻ることになります。石を投げられ、半殺しの目に遇いながらも、托鉢を続けました。釈尊はこう言っています。

かつて悪いことをした人でも、善行によって償うならば、その人はこの世を照らすことができる。雲から離れた月がそうであるように。（『ダンマパダ』一七三の意訳）

人を殺した人間が善行によって、罪や悪が消え去るわけではありません。一生かけて償う業を背負いながらもその人の生き方を全うできることを示しています。アングリマーラは報いを受けながら、本当の自己に出会う事ができたのです。そして、人間が再生できる道筋を見つけたのです。一方偽善者は、内省を拒み続ける限り人間の成長する道筋を自ら閉ざすことになるのです。

4、親鸞の悪と現代

釈尊から善導、そして親鸞に通じる悪への自覚は、仏教的神話に留まらない普遍的な自覚であることが理解できます。しかしなぜ近代以降現代において、私たちは悪と向き合う事をしなくなったのでしょうか？この問いについてユングは次のように論じています。

悪が非存在である限りは、誰も自らの影を真剣に取り扱おうとはしないでしょう。ヒトラーやスターリンが意味するのは単なる「完全性の偶発的欠如」ということになってしまうでしょう。人間の未来は影の存在を認めるか否かにかかっているのです。悪は、心理学的に言って、おそろしくリアルです。その力と現実性を見くびって形而上学的にしか見ない事は致命的な過ちです。残念ながら、これはキリスト教の根幹に関わることですね。悪は、非存在として、または人間の不注意としてもみ消そうとしても、決して消えることはありません。（1949, 12, 31）

この内容は、キリスト教教義の悪に関する捉え方である悪＝善の欠如に対する批判でもあります。元来日本人は、穢悪を払う思想を持つ民族であり、欧米化の過程で、死んだら天国に行くと安易に口にするようになりました。私たちは近代以降、キリスト教を背景にした悪の倫理を鵜呑みにしているのではないでしょうか？

悪の捉え方は、日本の死刑制度の存続に如実に表れています。しかし、いくら悪を排除しても、根本的な解決は得られませんし、一時的な安心感しか生まれません。いくら厳罰化しても犯罪の抑止力にはならないし、受け入れる社会が変わらない限り犯罪はまた起こります。

一方、親鸞の影に対する捉え方はユングと同質であります。ここで重要なのは、私たちが排除できない自らの悪を抱えたまま如何に生き